

◆ 東京都主税局長賞 ◆

「税は海を越えて」

桜丘中学校2年 佐藤 せり花

今年の夏、母と弟は神津島に行った。火山でできた人口二千人の小さな島だ。しかし、道路などが私の住む人口約三十六万人の北区と変わらなかったと写真を見せてくれた。人口が少ないのになぜ、と思っていると、北区と同じ東京都だから同じ基準で整備されているからだそうだ。費用の多くは、都税や地方交付税で島しょ部で支えているという。

島は、国土面積や領海を決める国の要だ。しかし、その多くが火山島であるため災害に見舞われやすく、また、周囲を海で囲まれているため港の整備など本州とは異なる部分で莫大な費用がかかる。加えて、教育、医療福祉、上下水道などもあるが、伊豆諸島の高齢化率は四割近くで、日本総人口の三割、区部や多摩地区の二割よりも高い。労働力人口が少ない状況は今後も続くことが予想され、都道府県税や国の負担がどうしても必要だ。

税の投入に加え、施設の整備や警察、消防など多くの人が島を支えている。実際、父親が仕事で神津島に行っていた同級生もいた。私の両親も島しょ部で勤務する可能性があり、家族は神津島、大島、三宅島、八丈島に行くなど、島は私にとっても身近に感じてきた。

火山島は噴火の兆候を掴むために継続的な観測が必要で、それらも税で行われている。普段は税の力は見えにくいですが、いざ噴火した際には島民の避難に重要な役割を果たす。私の生まれる十年ほど前にも三宅島で噴火が起き、全島避難があった。また、先日は伊豆諸島に向かう高速ジェット船が故障した事故があったが、船や港、飛行場の整備にも税が使われており、維持管理も容易ではないことを再認識させられた。さらに、先日南海トラフ巨大地震臨時情報も出されたが、神津島は二十メートルを超える津波の到着が想定されており、課題に継続的に取り組む必要がある。

しかし、一方的に島しょ部を支えているという認識は私の思い上がりだった。弟は自由研究のために神津島で砂のことを聞いた際、東京二〇二〇オリンピック大会では、お台場の海水浄化のために神津島の砂が使われたことを教えてもらった。以前お台場に行った際には、水質に良い印象はなかったが、今年行った際は、あのおいしは消え

ていた。小学生の時に、砂の自由研究をしていた私は胸が熱くなった。知らぬ間に、私は神津島から美しい砂を税によって支えてもらっていたのだ。

家族の神津島旅行をきっかけに、私は東京の島しょ部と税での強いつながりを実感した。まだ消費税しか納めていないが、島を守るために税のことを知っていきたい。納税が国民の義務だからではなく、より良い税の使い道を国民の一人として考えていきたいからだ。

税は海を超える。昔の人が想いを馳せて海を渡ったように、島を守る思いを税に乗せて届けたい。神津島まで続く青い空を見上げた私には、税を学ぶ楽しみがみなぎっている。